

---

apter in Series of Lours    ～アルミシオンに生きるもの～

心機一転気合い一発！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

If story chapter in Series of  
Lours      くアルミシオンに生きるもの

### 【Nコード】

N1674T

### 【作者名】

心機一転気合い一発！

### 【あらすじ】

ラウルの少女が歩む世界シリーズ、パラレルワールドIFストーリーです。

方針を変えました。それにともない、粗筋も変えました。

世界で大人気を誇るVRMMORPG『アルミシオンライフ』。

やり込みすぎてチート過ぎるデータを持つ桐島巧は、ある日、本当にチートな存在となって、そのゲームの世界に入り込んでしまった！  
今、彼の第二の人生が、その世界で幕を開ける――！

## 第一部分

「ん……ここは……何処だ？」

青々しい草花の生えた草原のと真ん中で、白い、真っ白な、病的なまでに、透き通るような白さと、真っ赤な、血のように赤い不気味な瞳を持つ人物、桐島巧きりしまこうは、そう呟いた。そして、

「おろ？ あれは……ってえええ！ ちょっと待てや！ 何であれがいるんだ！？ ちょっと待て、ちょっと待て？ 落ち着くんだ桐島巧……」

と大慌てした。

元々彼は、黒髪に黒い瞳、地元の高校に通うごく普通の日本人だ。そして、昨夜はきちんと布団の中で眠りに就いたはずだ。それがどうしたとか、今朝目が覚めたら、草原にいたのだ。

この光景には、ここ最近、というよりつい昨日、見た覚えがある。

「アルミシオンの、グレース村東の草原？」

そう、彼が見覚えある光景、それは昨夜、就寝前にログアウトしたはずの、最新技術を使った全く新しいゲームジャンル、VRMMORPG『アルミシオンライフ』に登場する、入門プレイヤー向けの草原だった。

彼が昨晚ログアウトしたグレース村からそう離れていない。

『アルミシオン』という架空世界を舞台に架空の『人生』ライフを送れる『オンライン』ゲーム。三つの単語を適当に重ねて決めたという、

目茶苦茶なゲーム名からは想像できないほどの人気を誇ったゲームだ。

最初に発売された、日本国内に限定しても、三千人がその虜になったという。

彼はそれを廃人といわれるまでやり込んでいる。

それはさておき、落ち着きを失いつつある巧は、自らの容姿の姿に気づく術もないまま、途方にくれた。因みに、彼にここが地球ではない事を知らせるきっかけとなった生物は、ブルンクという大人しい癒し系草食動物である。

(……今自分もハマっている、異世界トリップものか？ ……マジかよ)

取り合えず、ここがゲームの世界なら、可能性はあるだろうという何の根拠もない推論から、ステータスを表示しようと思って、そして驚いてのけ反った。

急に視界がぼやけ、変わりに鮮明な日本語表記の文字が現れたからだ。

巧は、そのステータスを読み上げ、

「アカウント名、レイルⅡサルヴァーン……レイルだと？ ちょっと待て！」

名前でいきなり止まった。

レイルⅡサルヴァーンとは、彼自身が書いている小説の主人公なのだから。

——しかし、彼はそれを見たとき、別のことについても危惧した。彼は再びそのステータスの名前を読み、嫌な汗がブワツと吹き出るような気がした。

——その危惧は、果して、当たっていることになる。

「……そういえば、さっきから俺にしては妙に声が高い様な……」

——詰まるところ、

胸を見る。大きい。

股間に触れた。大事な象徴がない。

——そう、彼が書いている小説の主人公は男ではなく女であり。

「まさか……レイルになりきっている？」

——彼自身がそのステータス通りの人間であるならば、

「……まてまて、本当に俺がレイルなら、あれが使えるはずだ……」

巧は、頭の中で念じた。

（「能力発動＞一世界当たりに含まれる構成成分＞レイルⅡサルヴァーン＞行動・解析」……）

そうして、彼の頭の中に、情報が入って来た。

構成要素1…名前 レイルⅡサルヴァーン、同2…年齢情報 1  
6 同3…性別 女……………といった具合に、彼自身の情報が隅々  
まで。果てには容姿までもが鮮明に脳裏に焼き付く。

(これってつまり、)

——そう、彼は、女性として、アルミシオンの世界に降り立って  
いたということである。

「んなのありかあああああああああ！」

草原に、十六歳くらいの声が轟いた。

——それと同時に、チート過ぎる彼女の物語が、始まった瞬間で  
もある。

## 第二部分

桐島巧。

改めて、レイルⅡサルヴァーン。

彼は、自ら書いていた小説の主人公のすべてと、世界的に大ブレイクしたVRMMORG『アルミシオン』の一部システムを受け継いで、アルミシオンの世界にトリップしてしまった。

その事を受け止めるのに、最初こそ混乱したが、落ち着きを取り戻して来ると、それを事実として飲み込むのにさして時間はかからなかった。

レイルは、改めて今の自身について、まとめることにした。

アルミシオンのシステムの方は、オートマッピング機能とステータス閲覧機能、及びHPとMP、ホールドスペースと『桐島巧』であった時のアイテム登録データ、及びその使用、金銭登録データ、スキル閲覧とその使用だった。つまり、スキルは閲覧出来ても登録データを引き継いでいない関係上、ゲーム内で覚えたスキルは全部使えなくなっているということである。

また、勿論サーバーと繋がっているというわけではなく、GPSのような機能は使えない。そのほかにも、ゲームの時と同じ様な機能は殆どが機能しないようである。

このことは、レイルとしての能力（スキル閲覧では「特殊検索【サーチ】」、<sup>エレメント</sup>「特殊解析【スキャン】」、<sup>エレメント</sup>「強制制御【インターセプト】」―構成要素」他、一部を除いて様々な形で出てきた上に、ここから使用することも出来るらしい）でも確認できた。

レイルとしての能力は、『何らかの構成要素であれば検索、解析、

作成、強制制御、改編、コピペ、削除をすることができる』というもので、その名を『要素支配』と呼ぶ。

制約が設けられているかのような能力だが、事実上、際限なく何でも好き勝手出来る、使い方と使わせる人を間違えばとんでもないことになる能力だ。

(……ということはあれか？ 別に解析結果にアルミシオンのスキルが使えないってのも出てないってことは……)

西の、グレース村に歩きながら、彼は黙考する。

例えば、『要素支配』が使える状態で、「起死回生【リザレクト】」(あらゆる悪性状態異常を回復し、HPを全快、さらに「体力強化【アーマー】」、「精神保護【メンタルガード】」「自己治癒力促進【オートヒール】」の効果)を使える自分を思い浮かべる。果して、どちらの方が役立つのか。

そんなことを考えながら、彼は西にあるはずの村へ向けて歩くことにした。

アルミシオンの世界なら、モンスターも出てくる。しかし、取り分け警戒するまでもない、と彼は思った。

特に、要素支配は常時発動しており、『有害な影響はすべて無効化』し、または意図的であれば『【(二次的なものも含めた)影響を受ける対象】という要素を実行犯に変更し、他の要素はそのままとする』機能を持っている。それがどのようなものかは置いておくとして、それ故に、恐れるものは一つとてないのだ。

むしろ、今の彼を害しようとするれば、逆にその害を自らが受けることになってしまう。



(……絶対にスキルあっても無駄だな……)

そう考え、ふと吹いた風で、暫し衣服や髪が靡くのを肌で感じた。

「んん!？」

そして、肌で感じる感覚に意識を集中したせいで、それに気付いた。

能力の他に、彼がレイルから引き継いだもの……それは多々あるが。

今問題にシなくてはならないことは、レイルの現在の種族と、現在纏っているである。何しろ、先程のような感じで能力を単純に使っただけでは、確認できる容姿について、衣服までは再現されない。主人公のすべてを受け継いでいるのなら、当然、種族も変わっているはずである。

レイルが書いていた小説の主人公は、ラウル族という。

この種族は、人間にそっくりな容姿で、長命。しかし繁殖力が若干低い。そして特筆すべきが、その殆どが希少な能力を宿していることと、そのために、奴隷制度の引き金となった種族ということである。

小説の主人公としてのレイルは、その制度で奴隷商に一度捕まったところを、隙を突いて仲間とともに逃げ出した、という設定だ。

改めて自身の今の容姿について考えてみると、その設定をもろに受け継いでいるせいか、やたらと汚く、みすばらしい恰好だった。

実際、ステータス画面でも、種族…ラウルとでていたし、間違いはないだろう。

全身の白さは、主人公の生れつきである（それでも、色素欠乏体質というのはラウル族でも病として認知されるが）。

その目の色は血のような赤、そして病的なまでに白い体。また、髪の毛の長さが、自ら設定したとはいえ、長かった。長くて、ボサボサだった。枝毛も数えきれないくらい。

どれくらい長いかというと、膝下にかかるかかからないくらいまでであった。後ほど切ってしまうかと思ったものの、とある理由で切ることが出来なくなってしまったのは別の話だが。

さて、このような、容姿に関する説明を挟んで、一体何を指し示しているのかというと。

前述のとおり、今のレイルは、小説の主人公としてのレイルをもろに受け継いでいる。故に、着ているものに関しても、意識を向けなければ異常に思わない、という状態になってしまっている（だからこそ、先程も目覚めた直後には気づかず、少し経ってから自分の変貌に気付いた）。これすなわち何を示しているのかといえば……。

——下の方から、ジャラリと、音が鳴る。まるで、そう。鎖を動かした時のような。思えば、今までずっと鳴っていた気もしてならない。

「何で……さっき、性別を確認した時に気付かなかったんだあああ！」

本日、二度目の絶叫。

本来なら、小説の主人公としてのレイルを戒めるはずだった『それ』は、忠実にその人物を受け継いだ今のレイルもしっかりと装備していた。

詰まるところ、

「んなもん、即時装備解除だ！」

レイルは自ら設定した主人公の事を再度思い出しながらも、嫌悪感を剥き出しにした。その嫌悪感の対象は、

「……すっかり失念してた……。レイルって最終章の終わりまでずっと奴隷商から逃げ出したままの状態で過ごすんだったっけか。そりゃそうだよな、首枷の鍵なんて、着けられた側が持つてる訳無いもんな」

ラウル族としての能力に制約を与える、封力の首枷だった。

まあ、結局のところ、今の彼には何の意味も成さないのだが。

「【初期化【フォーマット】】の魔石を貯めといてよかった」

「【初期化【フォーマット】】とは、アイテムに込められた特殊効果<sup>フォーマット</sup>を全て初期化するスキルだ。

スキル入りの魔石を入手する方法は三つ。購入か、ドロップか、自作か。自作の場合は、スキルをアイテムに込めるには、称号「裏アイテムコレクター」と共に入手する加工スキル最終レベルの、「特殊改造【カスタム】」が必要なのだが、レイルのデータは廃人クラス……無論、今でこそ使えなくなっているが、きちんと覚えて

いた。

画して。叫んだ割には大して苦勞せず予想外の装備品を外した  
レイルは、さらに歩を進める。

### 第三部分（前書き）

近々改稿します。なお、武器『電磁加速砲』については引き続きだそうかと思いますが、かなり後になると思います。

### 第三部分

レイルが目覚めた草原西部にある、小さい雑木林の中。そこで、もう一人、女性が目を覚ました。

彼女は、金髪に碧眼、セミロングのエルフの姿をしている。

「ん……こ、こは？」

上半身を起こし、見渡してみる。鬱蒼と生い茂る木々。一人であるには若干心細さを感じさせる光景だ。

「え？ 何処、ここ」

もう一度、辺りを見渡してみる。周囲は木々で囲まれている。が、ここはどうやら若干開けた場所らしい。

「……じゃなくて！ 何で光に包まれて、気が付いたら……見知らぬ……」

そこまで言いかけて、ふと似たようなフレーズを見たことがあるような気がした。

何処でだっけ、と今だにぼやける頭で考え、導き出した答えは、

「ネット小説でだ！ 異世界転移系！ まさか、自分も異世界に転移しちゃったとか！？」

叫んで、しかしバカバカしいとも思った。そんなことはありえない、と。

きつとここは日本の何処かに違いない。どっかの変態が誘拐事件

を引き起こして、その被害者が私なのだ、と最初はそう、思い込んでいた。

足元に転がる、それを見つけるまでは。

気づいたきっかけは本当に単純で、躓いたからだ。

「あたたたた……、躓いちゃっ……た………へ？」

まず足についた土を払おうとして屈み、ついで払いながら、何に躓いたのかを確認した。ここで『石とか根とかにでも躓いた』と思いついていけば、気づくのはさらに遅れただろう。

大きな、バズーカのような武器を発見するまでは。

彼女はその武器に、見覚えがある。それは、彼女自身がはまっていたMMORPG『コルステインミステリー』の武器。

「EMAガン？」

銃器系最強武器、EMAガン。正式名称、エレクトロマグネティズムアクセラレーショングン、所謂電磁加速砲がそこにあった。

彼女はそれを手にとり、しばし見つめていたが、

（これが本物なら異世界。ただの形だけなら、やっぱり日本のどこかでしょ）

何を思ったか腕に装着、早速試射してみた。

よく出来た、モデルガン。というわけではなかった。初速が約20 Km/s。強烈な衝撃波を伴って撃ち出された弾丸は、木々を薙

ぎ払って、そのままどこかへ消えてしまった。

「あ、はは……これ、本当に夢じゃないや……」

運営側の解説に因れば、魔力というものがコルステインには存在し、魔力は魔石というものにためることが出来る、ということらしい。

そして、電磁加速砲は、砲身に雷と土、無の魔石が含まれており、それに魔力を込めることにより、砲身内のレールと弾体に電流を生させ、電磁加速をしていて、無の魔石は反動を可能な限り少なくしているという設定だったはずだ。

結果。そんなものを撃ったにしては対して反動を喰らわなかった彼女は、これが現実で、異世界であることにやっと確信し、若干落ち込んだが、すぐに立ち直った。

「このままじゃちと動きづらいし……どうしよう……」

アイテムボックスとかのシステムも使えればなあ、等と思って、急に現れたシンプルなウィンドウに驚いた。

「ウソ！ ……全部これ、私のデータだあ……」

徐々に現状が掴めてきた自分に一喜一憂しながら、しかしどうしよう、まずはこの林からでて考えよう、等と考えながら、E M A ガンで出来た道（？）を歩きはじめた。

とある性転換した少年との出会いが、待っているとも知らずに。



「な!？ ん、だ……今のは」

レイルは、つい先ほど起きた現象を検証してみた。

ここは、村まであと300m地点。すぐ目の先には、『グレースの林』と呼ばれる小規模の雑木林があり、先ほど、その中から爆音が聞こえたかと思ったなら木々が何故か吹き飛ばされて、何かがレイルの体を通過して行ったのだ。さらに、今でこそ土煙を『消去』したが、それが通過した箇所は土煙が濛々とたった。地面が若干えぐれている。

しかも、それらはほぼ同時である。

レイル自身は、能力によって、何らかの通過による影響を掻き消したことについて、能力の発動記録を見れるわけでもなし。いや、やろうと思えば可能だが、面倒くさいので結局はやらずに。

何が通過したことは知る由もない。

能力による恩恵があるからこそ、ただ服と綺麗な白い長髪が靡いだけで済んだが、本来ならば通過ではなく、粉碎を意味しており、ひき肉を通り越して蒸発していてもおかしくない状況である。

何せ、電磁加速砲、通称E M Aガンの砲弾軌道上にいたのだから。

それを知らない彼は、『ま、どうでもいっか』と能天気な、木々が吹き飛ばされてしまった雑木林へと向かって行った。

少し経って、誰か一人、こちらに向かって歩いてきている。向こうも気づいたようで、何故か若干速歩きで近付いて来る。

さて、どうしようか。と、彼は黙考する。

あれからまだ数分。エルフの外見を持つ女性は、黙々と歩いていた。

それまでの間で、今の自分についても判明し、どうやらゲームデータを完全に引き継いでいるらしいことが判明した。以降はその名前を貫こうという意向だ。

ちなみにその方法だが、アイテムボックスが開けたのならば、もしかしたらステータスも？　と思い、アイテムボックスのデータが現れた時のことを思い返しながら、ステータス確認、と強く念じた結果。ステータスを開くことに成功し、自身の確認に至る。

彼女は自分の変化に若干驚くも、『まあ、今さらでは？』と、対して気にしなかった。

ちなみに、やり込みこそしてはいないが、彼女のステータスは高いほうではある。

コルステインのステータス画面トップは名前、LV、LP、HP、MPと、武器技術LVベスト3からなっている。

彼女のデータは名前がルナ。単純に、女性らしい名前が何かと考えていたら、満月が目に入ったことで付けた名だ。

LVはキャラクターの成長値を指す、あらゆるゲームでおなじみのものだ。最大値は全プレイヤー一律で10000となっている。ルナはLV8023だ。

LPは生命力を示していて、急所で重ダメージを受けると確実にゼロになるという性質を持つ。また、これが下がると最大HPも一時的に減る。レベルアップ時に最大値の上昇に若干差異が出るが、最終的には100000になる。最高値になるのは意外に速くLV6000で殆どのプレイヤーが最高値に達する。ルナの場合は最大値が100000だ。

このため、HPは生命力ではなく活動力を示す。歩くなどの基本動作でも減るが回復方法も単純で、何らかの形で『休めば』それだけで回復してしまう。基本、寝るなどすれば最大値まで回復する。ルナの場合正味最大値が150000。装備などでの増加値で25100の合計最大値が175100だ。

MPは魔法系の行動を度にHPとともに若干ずつ減る。こちらも休めば回復はする他、割合的にいえばHPより多く、アイテムで回復が出来る。最も、LP程ではないが。ルナの場合は正味最大値は17000、装備などでの増加値で4350の21350だ。

さて。そんなステータスを確認して自身の状態も確認できた彼女は、持ち前の切り替えの早さとプラス思考で、落ち込むもなく、次の行動をおこしていた。

そこが何処とも知らない場所ならば、まずは歩いて人気のあるところへ行くのが定石。情報を集めるにしても、休むにしても、だ。よって、二進も三進もいかない雑木林の中から、とにかく抜け出そうと適当に歩いているわけである。いや、適当ではないか、EMA

ガンで出来た道を通っているのだから。

そうして進んでいると、前から誰かが近づいてくるのがわかった。

「旅人かな？ とにかく助かった……いい人だいいいな」

そう呟いて、ルナは足を若干速めてその人物のもとへ向かって行った。

## プロローグ最終部分（前書き）

改稿予定……ルナは設定を零から作り直します。

## プロローグ最終部分

「いやー、まさか同じ地球出身の人だったとは……しかし、随分詳しいですね。この世界に来てから結構経つんですか？」

「いえ？ さっき気がついたばかりですよ？ 自分が書いていた小説の主人公、そっくりそのまま受け継いじゃってるっばいですけどね」

「……と言うことは、その情報はもしかして主人公の特殊な能力か何かで？」

「随分と頭の周りがよろしいことで、はい。構成要素と認識したものであれば、あらゆることを行える能力です」

こんな会話を繰り返しているのは、もちろん、先程出会いを果たした、レイルとルナである。

「こんにちわ」

「ああ、こんちわ。何か用ですか？」

「いえ、道に迷ってしまっただけですけど、近くに人里はありませんか？」

そんな感じで、単刀直入にルナが切り出したところから、二人の会話は始まり、しばらくの間続くことになった。

（あれ？ あんな武器はアルミシオンには無かったはずだし、さっき能力で調べた世界情勢でも銃器の存在自体ない。ということは、俺と似たような状況か？ ならグレース村まで一緒について行った方がいいな。ここがゲームと同じ世界だとは言え、同じ時代ではな

いみたいだし、人数が多い方が、相談もできていいかもな)

レイルはそんなことを考えながら、女性(＝ルナ)との対応を進めていき、この世界のことを知らないであろうルナを氣遣ってしばらくは行動を共にすることにしたのだ。

これについて、ルナは感謝の意を示し、それを快諾した。

実は歩いている間にも、能力等を使って出来る限り現在の世界情勢を調べていたレイルは、ゲーム時代から概ね七百年ほど経っていることと、ゲームの時に存在していた四つの大陸国家は健全で、世界共通通貨も使えるらしいことがわかっている。

しかし、七百年という月日は世界情勢が何度激変しても可笑しくない月日だ。

ゲームで使われていたアイテムも、古代道具として扱われているような結果が出たし、この世界の住民と出会えたことは安心できる要因の一つと思っていた。

だが、これから向かう村は位置関係的には全然ズレていないようだ。

と言うより、変動があったのは大体がそれぞれの国の主要都市だけで、辺境に点在する村などは位置だけは大して変わっていないようだ。寂れたか、発展したかは別として。

とにかくにも、一人では心細かった二人にとって、話し相手が出来るのは多いに歓迎だった。

特に、外見も中身も女性のルナとしては同性の仲間(と思い込ん

でいる。事実、まだ敬語だけしか聞いていないので、オレっ娘しか見えていない）が増えるのは多いに感謝感激だった。

「構成要素……ですか」

「はい。例えばこの雑木林を構成している木々とか、その種類とか。本数とか、ですね」

「……なるほど。わかったようなわからないような……とにかく、果てしなく専門学的っぽい能力であることはわかりました」

「無味乾燥とした感想ですね……。でも、それで調べてわかったのはお金ですねえ」

今のレイルの所持金は、100,000,000イル。漢数字に直すと、一億イルである。

「お金……そういえば、さっきステータス見たら、ゲームの通貨じゃなくて、イルとかミリイルとかってなっていましたね」

「ああ、転移するときに若干換算なんかされたんじゃないですか？ 因みに、千マイクロイルがミリイル。そして千ミリイルでイル。」

「す、すごい大金なんですね、この『イル』って。わ、私、一千万イルは持ってますよ？」

「心配しなくてもいいです。俺はアルミシオン結構やり込んでいましたからその上を行ってますよ。そうですね、丁度一億イルあります……って、何です、その敬遠するような目は？」

「……………」



返事は、とても冷めたもので、ルナの心中はというと。

（うわー、そこまでやる人って、一体……）

彼女の中で、知らずとレイルに対する好感度が下がった瞬間だった。

因みに、ゲームとしての『アルミシオン・ファンタジー』に置ける、イルの平均保有高は二千五百万イルとなっている。

## プロローグ最終部分（後書き）

若干今話は短めでしたが、プロローグは終わりです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1674t/>

---

If story chapter in Series of Lours    ～アルミシオンに生きるもの～

2011年10月6日02時18分発行